連携先世界遺産：　醍醐寺
醍醐寺恩賜館の現状調査及び保存修理に向けた提言

柱傾斜を中心とした現状把握と課題整理

■受講生

南薗　佑月（京都橘大学・文学部・4回生）、谷　日那多（京都橘大学・文学部・3回生）、岩城　百香・榎　麻友奈・川角　蓮・北林　慎人・屈　敬和・桑原　孝太朗・谷　春奈・中　ひなの・星田　悠都・牧迫　悠人・吉田　京祐（京都橘大学・文学部・2回生）

全体リーダー:谷日那多　調査リーダー:屈敬和　報告書リーダー:岩城百香・中ひなの　発表リーダー:吉田京祐

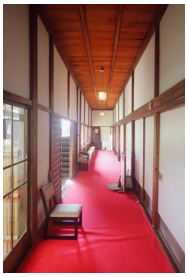
■担当教員

小林　裕子・山田　宏（京都橘大学・文学部歴史遺産学科・教授）

活動目的・概要

目的:今年度の本学PBLでは、御所から移築された「恩賜館」を対象に、保存修理に向けた基礎的調査実施を主軸としました。近年、恩賜館の傷みが目立ちはじめており、その保存修理に向けて現状を正確に記録し、どの部分に問題が生じているのかを明確にしたいと考えたことが発端です。そこでまず、建物の構造・素材・周辺環境を踏まえ、外観や内部の損傷、経年劣化、利用にともなう課題を総合的に把握します。つぎに、現状が本来の姿といかに異なっているか、また保存上のリスクがどこに潜んでいるかを検討します。そのうえで、得た情報を重要度・緊急度の観点から整理し、必要な修理や補強、環境改善、将来の維持管理体制など、のぞましい保存方針を導き出すことを目指します。こうした調査と検討を通じ、恩賜館の歴史的価値を損なうことなく、長期的な活用を可能とする基盤づくりを活動の目的としました。

概要:恩賜館の保存修理に向け、上空からの屋根撮影及び柱傾斜実測を中心に建物の現状と問題点を調査し、得られた結果をもとに改善点と修理の方向性を検討しました。



◆主な活動

2025.9.21 醍醐寺での講義及び見学
2025.10.5 オンラインによる知識伝達と打ち合わせ
2025.10.15 醍醐寺での予備調査
2025.10.19 ドローン練習
2025.10.20･21･29 恩賜館に関する図面作成
2025.11.3 ドローン練習
2025.11.5･10 醍醐寺恩賜館での本調査
2025.11.12 調査資料とりまとめ
2025.12.1･3･6 成果発表準備
2025.12.7 成果発表会
2026.1.17 上醍醐登拝

活動の成果

企画案

本企画は、醍醐寺恩賜館の保存修理に向けた基礎資料を作成することを目的とし、建物の現状把握および課題を整理するものです。特に、構造上重要な柱の傾斜に着目し、各所の傾きの程度や分布を測定し、建物全体への影響を考察します。あわせて、外観・内観の劣化状況や周辺環境による影響も観察し、総合的に問題点を整理します。これらの調査成果をもとに、必要となる修理箇所や優先度など具体的な改善点を提示し、さらに恩賜館の歴史的価値を保持しながら長期的な活用を可能にする保存修理計画の立案に繋げることを目指します。

実測結果

【恩賜館　鴨居レベル測量と柱傾斜の実測結果】

本調査において、恩賜館鴨居の水平を測定した結果、三の間北西角の柱を基準とすると、二の間における柱の沈下が最も顕著であることが確認されました。特に入口正面にあたる二の間仏間側は、柱の沈下が大きく、約41～50mmが計測されました。また、二の間南側においても明らかな沈下が認められ、南西方向へ沈みこむ傾向がみられました。一方で、二の間北東における沈下は軽微であり、隣接する一の間は全体的に沈下量が小さく、特に北西部は最も影響が少ない領域と判断されます。

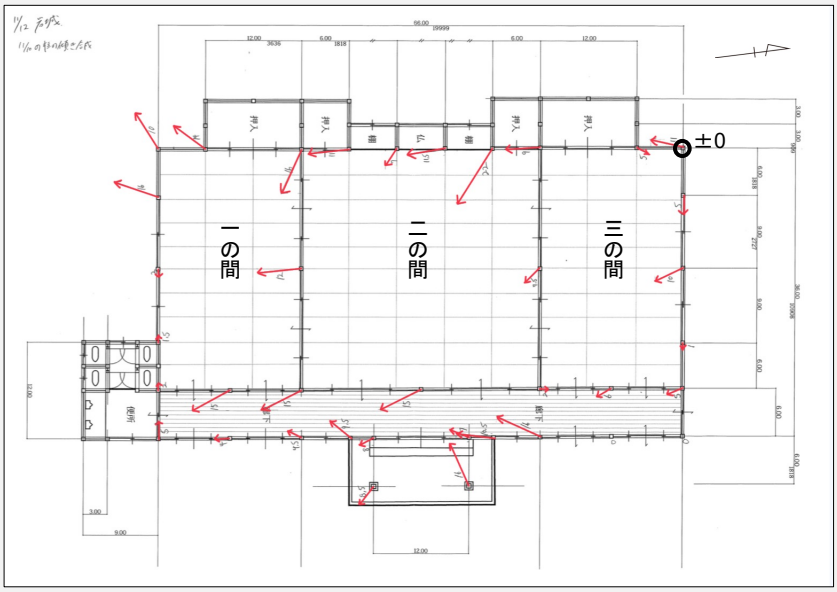
さらに、入口付近の柱に局所的な問題が認められました。入口北側の最初の柱は約41～50mmもの大きな沈下が生じているのに対し、その隣接柱は1～10mm程度と差異が大きい値を得ました。同様に入口南側柱も21～30mmの沈下が確認されており、入口周辺部の構造安全性に注意を要します。また、廊下南側についても21～30mmの沈下し、南方向へ沈下する傾向がみられましたが、二の間仏間部分ほど深刻ではありませんでした。以上の結果から、二の間の南西部および入口周辺部を中心として、偏った沈下が進行していると考えられます。

傾斜実測結果と合わせて分析すると、二の間西側において、柱の沈下とともに真南方向への傾斜が確認できます。また、廊下部分についても、南方向へ明らかな沈下傾向が見られます。総じて、建物全体が南側へ沈下する傾向にあると考えられます。

【恩賜館　柱傾斜の実測結果】

恩賜館の柱傾斜は、実測結果によると右図のように、建物全体の柱が南側に傾いていることがわかります。

このことは、南方向への床の沈下とともに建物自体の構造的なゆるみに起因すると考えられ、経年劣化等による影響が示唆されます。



【恩賜館内の調書作成】

今回の調査では、恩賜館内部の調書作成をおこない、館内を観察しながら損傷箇所を図面に書き込む作業を中心に進めました。柱の傾き、襖と柱の間に生じた隙間、天井板に残る雨漏りの痕跡などを丁寧に記録した結果、館内の各所で予想以上の劣化が進んでいることが明らかになりました。とくに天井の雨漏り跡は、単なる染みではなく、天井材の腐朽が進行している可能性を示す重要な兆候と考えられます。また、柱と襖の間にみられる隙間は、建物全体の微細な変形や傾きが進んでいることを示唆しており、複数の部屋で共通して確認されています。これらの状況から、恩賜館では局所的な損傷にとどまらず、構造的および環境的要因が重なって劣化が広がっていると判断され、早期の対策が求められるといえます。

活動を振り返って

中 ひなの（文学部歴史遺産学科2回生・報告書リーダー）

今回の活動では、歴史ある建築物を対象とした実地調査をおこないました。柱傾斜の実測や細部の確認など、これまで経験したことのない作業が多く、最初は戸惑う場面もありました。しかし、実際に建物と向き合いながら調査を進めることで、建築調査の基本的な手順や、どのような点に注意して観察すべきかといった実務的な視点を身につけることができました。また、私は報告書作成のリーダーを務めることになり、うまくまとめられるのか不安もありましたが、各グループが積極的に協力してくれたおかげで、一つの報告書として形にすることができました。その過程で、計画性の重要さや、情報を共有しながら進めることの大切さを実感しました。今回得た経験は、建築への理解を深めただけでなく、今後の大学生活で必要となる力を養う機会にもなったと感じています。これからの学びにしっかりと生かしていきたいと思います。

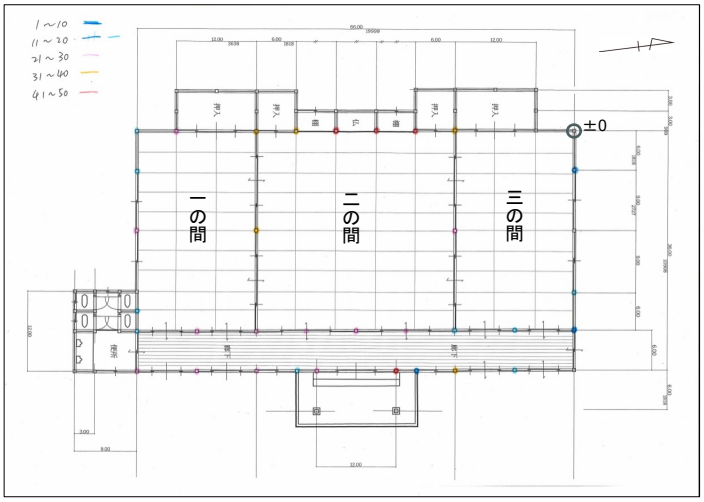
担当教員からのコメント

小林 裕子・山田 宏（文学部歴史遺産学科・教授）

平安時代に創建された醍醐寺は、千年以上にわたり法灯を絶やすことなく、今日までその教えと伝統を守り継いできました。寺には平安時代からの遺産のみならず、後代に造立されたもの、あるいは他所から移安された貴重な文化遺産も多く、長い歴史の層を宿すその姿には、深い感銘を禁じ得ません。そうした歴史的環境のもとで、今年度の学生調査において近代建築を対象に実施できたことは、教育的にも極めて意義深いことでありました。学生たちは、実測をはじめとする建築調査の実務にはじめて触れ、困難に直面しながらも、観察の要点や調査手順を自らの経験として身につけていきました。また、調査後には各班が協力して報告書を取りまとめ、情報整理や議論を通じて協働的な学びの姿勢を育んだことは、専門教育のみならず、今後の社会的成長においても大きな財産となるはずです。

最後に、本調査の実施にあたり多大なご理解とご協力を賜りました醍醐寺の皆さま、ならびに関係各所の皆さまに、深く御礼申し上げます。

活動資料



(1)鴨居レベル測量の実測結果
西側の柱が沈んでいることが判明

(2)一の間　柱・鴨居の接合部
柱に割れが入っている・接合部に隙間がみられる

(3) 玄関前廊下　天井裏
雨漏りの痕跡がみられる

(4)三の間西側　天井　雨漏り跡

(5)ドローンによる屋根の撮影画像